

***夏近し (L' ETE APPROCHE)**

根が強いからでしょうか、道路や線路際の土手に植えられているニセ・アカシア (le robinier) が、髪飾りの様な形のクリーム色の花を沢山に咲かせて若葉に映えている風景を眺めていたのも昨日迄の事、5月も末になれば木々の花の姿は殆ど消えて、プロペラの様な、小舟の様なガクに薄い黄色の小さな花をつけた菩提樹 (le tilleul) が、大気にそこはかとない芳香を漂わせて、夏の近いことを知らせています。アパートの庭に咲く色とりどりのバラの花 (la rose) も、むしろ夏を唄っているかに見えます。天気がよい時は日の出前から日暮れまで一日中、メルル (le merle (クロウタドリ)) が、決して二度と繰り返すことの出来ないようなメロディを、そよ風に乗るように声高に唄い続けます。6月に入れば早々に幼稚園のお手伝いでパリ郊外コンパン (Compans) の農園へ「イチゴ狩り」 (la cueillette des fraises) に出掛けます。野原や畦道にはモネの絵の様にヒナゲシ (le coquelicot) が紅く揺れていることでしょう。ゆったりと晩春の時間が流れ行きます。

***ロシュフォールの恋人 “エルミオーヌ”****(LA DEMOISELLE DE ROCHEFORT « HERMIONE »)**

24歳の若さで異例の元帥に昇格したフランスのラファイエット将軍 (1757-1834) が 1780年にルイ 16世の命を受けて、英国の重圧に苦しむコロン達を支持してアメリカの独立戦争に参戦すべく大西洋を渡った時の軍艦 “エルミオーヌ号” を、そっくり当時のままに建造しようと 1997年ロシュフォールの造船所 Arsenal de Rochefort と、近くの縄工場 Corderie royale で作業が始まりました。ルイ 16世の頃はこのような戦艦 1艘の造船に 10ヶ月から 1年を要したそうですが、現在同じ物と同じ材料で、同じ工法で造ることは全くの芸術と云え、10年の年月を掛けて 2007年に進水との当初の予定が 17年経った今日も作業が続く、今のところ 2015年の4月完成との事です。完成後はラファイエット将軍が辿ったと全く同じ航路をアメリカへ向かう予定で、既に乗組員も決まっているそうです。長さ 66m、幅 11,50m、帆柱の高さ 56,50m の帆船が大海を進む美しい姿が期待されます。



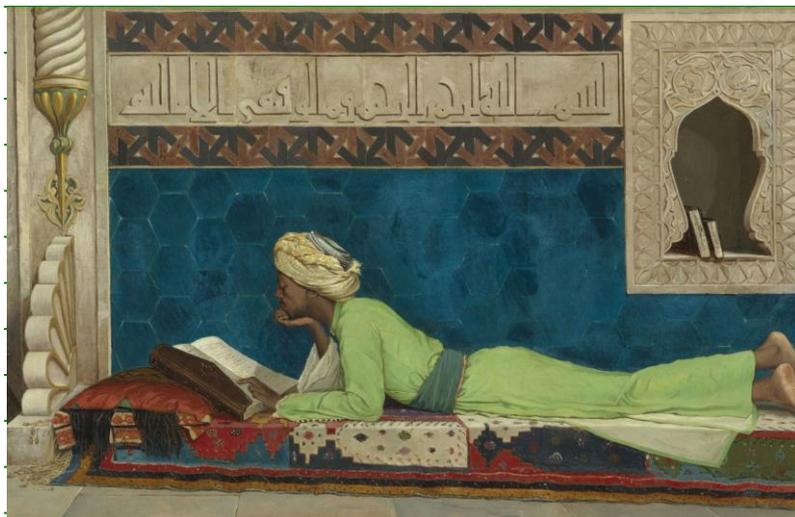
*「美術館誕生」展 (Expo. « NAISSANCE D' UN MUSEE »)

2012年12月に北フランスの嘗ての炭鉱町に開館したパリ・ルーヴル美術館の分館“ルーヴル・ランス”(le Louvre Lens)に続き、国外初の分館がアラブ首長国連邦(les Emirats arabes unis)の首都アブ・ダビ

に“ルーヴル・アブ・ダビ”(le Louvre Abu Dhabi)の名で準備が為され、フランスの建築家ジャン・ヌーヴェル(Jean Nouvel) (パリのカルチエ財団、アラブ学院、ケ・ブランリー美術館、等を設計)の手で建築が進められています。

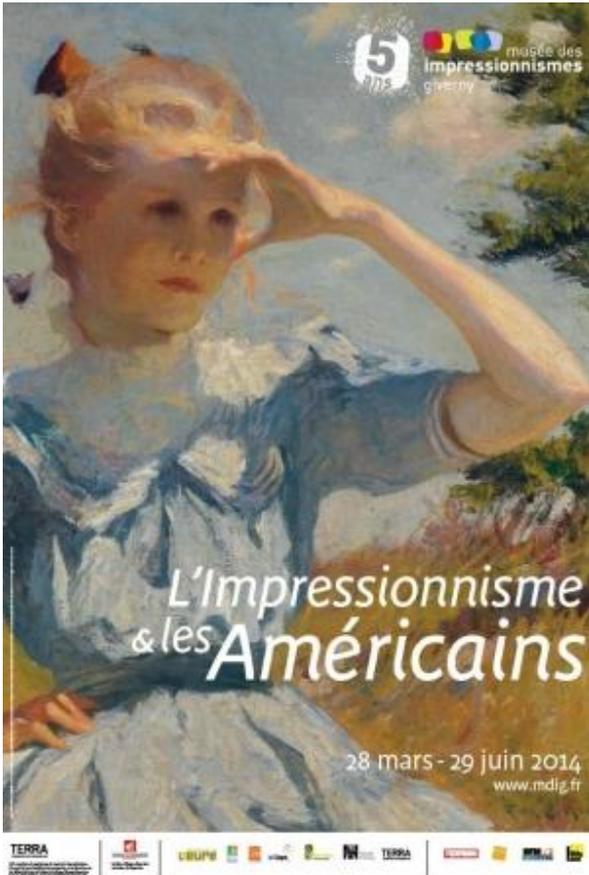


そこに展示されるものは、パリのルーヴル美術館所蔵の46万点の絵画・彫刻の中から既に160点が選り抜かれて運送を待つばかり、此の度その160点を「美術館誕生」とのタイトルで特別展を開催、一般公開することになりました。東洋と西洋を結び、仏教でもキリスト教でもないコーランの国で、これから30年は展示される美術品は「(コーランを)学ぶ若い回教徒」(« Jeune Emir à l' étude » Osman Hamdi Bey 画(1878))、紀元前2千年紀のメソポタミアの服装をした「バクトリアの王妃」像(« Princesse de Bactriane » début Ile mill é naire avant Jésus Christ)、中世のキリスト像から10世紀の踊るシバ神(d' un Christ du Moyen- Age à un Shiva dansant du Xe siècle)、ローマ皇帝アウグストスの大理石像に、2世紀のガンダーラの菩薩像(un marbre de l' empéreur Auguste voisine avec une statue du Ile siècle de Bodhisattva,issue du Gandhara)、マルムーク朝(トルコ系イスラム王朝)のコーランとゴシック体の聖書(un Coran mamelouk et une Bible gothique)、等々の他にピカソの「婦人の肖像」(« Portrait de femme » (1928)Pablo Picasso)、ルネ・マグリットの「読書する女」(« la lectrice soumise » (1928)René Magritte)、イヴ・クランの独特なブルーの「人体測定」(« Anthropométries » (1960)Yves Klein)、、、、東西の文化の違いを深く感じさせる貴重な宝物ばかりが展示されていますから、わざわざアブ・ダビまで足を運ぶ必要は無さそうです。尚、既



に雇用済みの主な現地職員はパリへ招かれて研修、ソルボンヌ大学に開設された特別講座にて美術、歴史、宗教そして時代背景など東西文化の特徴を学んで帰り、開館に備えています。

パリ・ルーヴル美術館にて
7月28日迄、入場料13ユーロ、
火曜を除く毎日9時から17時45、
(水曜、金曜は21時45迄)



*「印象主義とアメリカ人」展

(Expo. « L' IMPRESSIONNISME ET LES AMERICAINS »)

印象派の父クロード・モネ (Claude Monet(1840-1926))が都会を避けてノルマンディ地方の片田舎“ジベルニー”へ移り住んだのは1883年のこと。1887年頃からは印象主義に賛同するテオドール・ロビンソン等アメリカの画家達が訪れるようになり、モネに会い、モネも彼等を家に招いたり、共に制作したりして交流が為されていました。そうしたアメリカ人の印象派の画家達、メアリー・カサット、ジョン・シンガー・サージェント、ジョン・ヘンリー・トワッチマン等がフランス、そしてアメリカの景色を描いた作品80点余りを展示、その殆どはアメリカ各地の美術館からの貸し出しを受けた初公開の作品です。会場はモネの家に近いジベルニーの美術館 Musée des impressionnisme Givernyにて6月29日迄毎日10時—18時、入場料7ユーロです。

*駅のホームで出産 (L' ACCOUCHEMENT SUR LE QUAI DE LA GARE)

いつでしたか小信で「メトロの中での出産が3日間に2回」と題して、いずれも母子の無事をお伝えしたことがありましたが、先日、21才の娘さんウーラ(Oura)が母親を病院へ見舞っての帰途、パリ郊外の駅のホームで電車を待つ間に突然陣痛に襲われ、止む無くプラットフォームに直に横たわり、それに気付いた人がSAMU(Service d'aide médicale urgente : 緊急医療救助サービス)に連絡、電車の行き来に沢山の好奇心の目もありましたが、救急隊が到着した時には既に男の子を出産、応急処置の上で病院へ搬送されました。予定日より1ヶ月も早かったのだそうですが、何人かの乗客の親切な手助けもあって、1時間も掛らない安産、母子共無事で何よりでした。赤ちゃんはアーメド(Ahmed)と名付けられたそうです。(Tout s'est très bien passé en moins d'une heure)



*2014年5月1日 Fête du Travail : 日の出06時30・日の入21時05、気温 : パリ11℃・16℃曇天、ニース13℃・20℃、ストラスブール10℃・17℃ 今号は無事だったパリの建物の話題を取り上げました。